

「p4」

本書編纂に當りて

文學博士 大槻文彦

先人、嘗て、文彦らに、王父が誠語なりとて語られけるは、「およそ、事業は、みだりに興すことあるべからず。思ひさだめて興すことあらば、遂げずばやまじ、の精神なかるべからず。」と語られぬ。おのれ、不肖にはあれど、平生、この誠語を服膺す。本書、明治八年起稿してより、今年にいたりて、はじめて刊行の業を終へぬ。思へば十七年の星霜なり。こゝに、過去経歴の跡どもを、おほかたに書いつけて、後のおもひでにせむとす、見む人、そのくだ／＼しきを笑ひたまふな。明治七年、おのれ、仙臺にありき。こは、その前年、文部省のおほせをうけたまはりて、その地に宮城師範學校といふを創立し、校長を命ぜられて在勤せしをりなりけり。さるに、この年の末に、本省より特に歸京を命ぜられて、八年二月二日、本省報告課（明治十三年に、編輯局と改められぬ。）に轉勤し、こゝにはじめて、日本辭書編輯の命あり。これぞ本書編輯着手のはじめなりける。時の課長は西村茂樹君なりき。その初は、榊原芳野君とともに、編輯のおほせをかうむりたりし

に、幾ほどなくて、榊原君は他にうつりて、おのれひとりの業とはなりぬ。後に聞けば、初め、辭書編輯の議おこれる時、和漢洋を具徴せる學者數人、召しあつめられむの計畫にて、おのれは、那珂通高君の薦めなりきとか聞きつる。又これよりさきに、編輯寮にて語彙を編輯せしめられしに、碩學七八人して、三年の間に、わづかに「あ、い、う、え」の部を成せりき。横山由清君もそのひとりなりしが、再舉ありと聞かれて、意見をのべられけるは、「語彙の編輯、議論にのみ日をすぐして成功なかりき。多人數ならむよりば、大槻一人にまかせられたらむには、却て全功を見ることあらむ。」といはれたりとなり。此事、横山君の直話なりとて、後に、清水卯三郎君、おのれに語られぬ。此業の、おのれひとりの事となれるは、かゝる由にてやありけむ。

初、編輯の體例は、簡約なるを旨として、收むべき言語の區域、または、解釋の詳略などは、およそ、米國の「エブスター」氏の英語辭書中の「オクタボ」という節略體のものに倣ふべしとなり。おもへらく、「オクタボ」の注釋を翻譯して、語ごとに埋めゆかむに、この業難からずとおもへり。これより、従來の辭書體の書、數部をあつめて、字母の順序をもて、まづ古今雅俗の普通語とおもふかぎりを採り分類して、解釋のありつるは併せて取りて、その他、東西西洋おなじ物事の解は、英辭書の注を譯してさしいれたり。かくすることに數年にして、通編を終へて、さて初にかへりて、各語を逐いて見もてば行けば、注のなれるは夙く成りて、成らぬは成らず、語のみしるしつけて、その下は空白となりて、老人の齒のぬけたらむやうなる所、一葉ごとに五十七語あり、古語古事物の意の解きがたきもの、動植物の英辭書の注釋に據りたりしもの、仔細に考へわくれれば、物は同じけれども、形状色澤の、東西の風土によりて異なるもの、其他、雜草、雜魚、小禽、魚介、さては、俗間通用の病名などにいたりては、支那にもなく、西洋にもなく、邦書にも徴すべきなきが多し。かく、一葉

ごとに、五十七語づつ注の空白となれるもの、これぞ此れ編輯業の盤根錯節とはなりぬる。筆執りて机に臨めども、いたずらに望洋の歎をおこすのみ。言葉の海のただなかに權緒絶えて、いづこをはかどさだめかね、ただ、その遠く廣く深きにあきれて、おのがまなびの淺きを恥ぢ責むるのみなりき。さるにても、興せる業は忌むべきにあらず、王父の遺誡はここなりと、更に氣力を奮いおこして、及ぶべきかぎり引用の書をあつめ、また有識に問ひ、書に就き、人に就き、ここに求め、かしこに質して、おほかたにも解釋し、旁、又、別に一業を興して、數十部の語學書をあつめ、和洋を參照折衷して、新にみづから文典を編み成して、終にその規定によりて語法を定めぬ。この間に年月を徒費せしこと、實に想像の外にて、およそ本書編成の年月は、この盤根錯節のために、つひやせること過半なりき。

解釋をあなぐる事につきて、そのひとつふたつを言はむ。某語あり、語原つまびらかならず、外國語ならむの疑ひあり。或人、偶然に、「そは何人か、西班牙語ならむといへることあり。」といふ。さらばとて西英對澤辭書をもとむれど得ず。「何某ならば西班牙語を知らむ」、「君、その人を識らば添書を賜へ、」とて、やがて得て、その人を訪ふ。不在なり、ふたたび訪ひて遇へり。「おのれは深く知らず」さらば、君が識れるに、西語に通ぜる人や「p5」あらむ、「某學校にその國の辭書を藏せりとおぼゆ」、「さらば添書を賜へ、」とて、さらに、その學校にゆきて、遂にその語原を知ることを得たりき。捕吏の、盗人を蹤跡する詞に、「足がつく」、「足をつける、」といふことあり。語釋の穿鑿もこれに相似たりと、ひとり笑へる事ありき。その外、酒宴談笑、歌吹のあひだにも、ゆくりなき人のことばの、ふと耳にとまりて、はたと膝打ち、さなりさなりと覺りて、手帳にかいつけなどして、人のあやしみをうけ、又、汽車の中にて田舎人をとらへ、その地方の方言を問ひつめて、はては、うるさく思はれるることなど、およそ、かかるをこなる事も多ばるばるありき。すべて解釋の成れる後より見れば、何

の事もなきようにみゆるも、多少の苦心を籠めつる多かり。

余は、日に夜に語原を研究してあり、この事、苦心中の苦心なれば、語原の研究に就きては、更に、若干條を述べむ。

一語に數義あるものは、その最も古き意義を、語原とすべきは勿論なるが、その語に、古義あるに心づかず、轉轉したる意義につきて考ふることあるを、最も恐るる所とす。又その數義の轉じたるは、如何なる理由に因るか、その遷れる經路を示さずはあるべからず。是れ亦苦しむ所なり。

爰に「ばさら」と云ふ語あり。その出典を集めたるに、數異義ありて、先ず古きに、二義あり、その語原と認むるは、跋折羅、梵語にて、金剛石のことなり、その二は、獨鈷、五鈷を跋折羅といふ。

『翻譯名義集』に「金剛石、梵語、跋折羅。』『傳教大師將來目錄』に「五鈷、跋折羅、一口。」

『倭名抄』卷十參の二丁、僧坊具、「參鈷、大日經流云、獨鈷、參鈷、五鈷、跋折羅、千手經日、若爲降伏一切大魔神者、當於跋折羅手」無常經云、金剛智杵碎邪山、永斷無始相纏縛。」

「鈷」とは真言にて、行を修する時用ゐる金屬製の具にて、大き、手に握るばかりのもの、首尾、鋒の形を成し、一鋒なるを獨鈷と云ひ、參鋒なるを「參鈷」、五鋒なるを「五鈷」と云ふ。

然るに、南北朝の頃、足利氏の將士の衣服、飲食、遊興に過差の奢侈を從にするに、「ばさら」と云ふ語あり。江戸時代に及びては、放逸無類なるを「ばさら」と云へり。この語、前の、金剛石、獨鈷の跋折羅と同語なるか、さるにても余りに、至硬と至軟との差あり。或は後なるは『文選』の註に、「婆娑、放逸貌」とある婆娑なりと云ふ説もあれど、「ら」を如何にせんかと、案じ煩ふこと久かりしき。

『建武式目』「近日號「婆佐羅」、專好「過差」、云云、風流服飾無「不驚」目。」「p6」

『太平記』二十四、天龍寺建立事「そぞろなるばさらに耽りて、身には五色を粧り、食には八珍を盡し、茶の會、酒宴若干の費を入れ、傾城田樂に無量の財を興へしかば、云々。」

寫本『洞房語園』(享保)「萬治寛文の頃、町町に六法男達といふ者徘徊して、云々、吉原に入込み、抜折羅狼籍の事共、度々に及ぶ。」「天和笑委記」卷六「ばさらを好む伊達女。」

然るに平安朝の頃、雅樂舞樂に笛を吹く調子、舞を舞う手振に、本法の外に出でて、味あるやうに吹き、又舞ふ事を「ばさら」と云ふと云ふ事を見出したリ。

『續教訓抄』(文永)、十一に、友正が笛を白河院、聞こしめし、褒めたまひて、「下藤の笛ともなく、ばさらありて仕るものかな。」「體源抄」(大栄)卷九、舞の事、「萬人蜀目見之、不美何の興かあらむや、ばさらあり、しなあり、振舞はむとすれば、拍子を違へ、又拍子を不_レ乖とすれば、ばさらなし、云云、此兩事を兼ねて、めでたく見むこと、云云、誠にありがたきなり。」

右の笛、舞の「ばさら」を、中間に入れて解せられたり。

第一、金剛石は至つて堅きもの。

第二、獨鈷石のなに移りたるは、堅きを以つて、如何なる煩惱をも碎き、天魔をも打ちすえて降伏せしむる意。

第三、舞笛の名に移りたるは、本法を破りて、以外の技をすること。

第四、常軌を逸して、過差なる奢侈に耽ること。

第五、又轉じて放縱無頼なる振舞すること。

此のごとく、語の時代轉義を次第して、始めて、第五の語原は第四として、第四の語原は第三、次第に溯りて根本語原の金剛石となり、至硬より至軟に四轉して、意義變遷の徑路、整然分明なるを得たり。至堅を語原とし、轉轉して終に「ばさら」を好む「伊達女」など、「お轉婆娘」の意となり、又「ばさける」などいふ語を生ずるに至る。語義の變遷、奇なり妙なりといふべし。植物名、動物名の語原を究むるなどには、先ずその物の野生にあるか、無きかを考え、野生にあらば本邦固有のもの、無くば外來のものとし、又、その物の名の何時頃の書に、始めて見えたるかを思はずはあるべからず。こ

れを研究の標準とす。然して、外國より入れたるは、藥用の必要とせしものなることも、考慮の中に置くべし。

山椒を「はじかみ」と云ふ。これは野生あり、語原は「罅裂子」なり。「生薑」渡りて、「呉のはじかみ」と云ひき。辛きこと「椒」の如くなれば名づけたるなり。『本草和名』に「乾薑、久禮乃波之加美」とあるは、天治本『新撰字鏡』卷七の參十六丁に「千薑、久禮乃椒」とあり、これを藥用としたるは、『倭名抄』、藥名類に、「乾薑丸、千薑散」とあるにて知らる。同書、「p7」鹽梅類に「乾薑、保之波之加美」ともあれば、食物の加藥ともしたるなり。後に藥用の必要として、その苗を取寄せて、土に植ゑたるに因りて、『医心方』卷參十の二丁に、「土薑」とあり、外來種なること知るべし。

梅も野生になし。初め支那より烏梅を取寄せて、藥用としたるなり。因りて、字音にて烏梅と云いき。『倭名抄』、藥名類に「烏梅丸」あり。『医心方』卷五の四十丁に、「烏梅」と見ゆ。後にその苗木を取寄せて、植ゑつけて、烏梅の木と云ひしが、直ちに樹の名となりしなり。

銀杏の成る「いちよう」といふ樹あり。この語の語原、并に假名遣は、難解のものとして、語學家の脳を悩ましむるものにて、種種の語原説あり。この語の最も古く物に見えたるは、一篠禪閣(兼良公、文明十三年八十歳にて薨ず)の『尺素往來』に、「銀杏」とある、是なるべし。文安の『下學集』にも、「銀杏異名鴨脚、葉形、如三鴨脚」とあり。字音の語の如く思はるれど、如何なる文字か知られず。黒川春村大人の『硯鼠漫筆』に「唐音、銀杏の轉ならむ」などあれど、心服せられず。降りて、元禄の『合類節用集』に至りて、「銀杏、鴨脚子」と見えたれど、是れも如何なる字音なるか解せられず、正徳の『和漢三才圖會』に至りて、「銀杏、鴨脚子、俗云、一葉」とあり。始めて、「一葉の字音なること見えたり。然れども、一葉の何の義なるか、不審深かりき。加茂真淵大人の『冠辭考』、「ちちのみの」の篠にも、「いてふ」と見ゆ。假名遣は『合類節用集』か、『三才圖會』かに據られたるも

のならむか。語原は説かれてあらず。さて『倭訓栞』の後編の出たるを見れば（明治後に出版せらるる）、
「いてふ、一葉の義なり、「ちえ」反「て」なり、各一葉ずつ別れて叢生せり、因て名とす」と、始め
て解釋あるを見たり。十分に了解せられざれど、外に據るべき説もなければ、余が曩に作れる辞書
「言海」には姑らくこれに従ひて「いてふ」としておきたり。然れども、一葉ずつ別るといふこと、
衆木皆然り、別に語原あるべしと考へ居たりしこと、三十年來なりき。

然るに、一三年前、支那に行きて帰りし人の、偶然の談に『己れ支那の内地を旅行せし時、銀杏の樹
の下に立寄り、路案内する支那人に樹名を問ひしに「やちやお」とこたえたり。我が邦の「いちやう」
と聲似たらずや』と語れるを聞きて、手を拍ちて調べたるに、鴨脚の字の今の支那音は「やちやお」
なり。（支那にては、この樹を公孫樹と云ひ、又、鴨脚とも云ふ）是に於て、案ずるに、この樹、我が
邦に野生なし、巨大なるものもあれど、樹齡七百年程なるを限りとす。されば鎌倉時代、禪宗始めて支那
より傳はりし頃、私の禪僧相往來せり。その頃、實の銀杏を持ち渡りたる者ありて、植ゑたるにて、
その時の鴨脚の宋音「いちやう」（今の支那音「やちやお」は、その變なり）なりしものと知り得たり。
その傍證は實の銀杏を「ぎんあん」（音便にて、ぎんなん）と云ふも、宋音なり。實の名、宋音なれば、
樹の名の宋音なるべきは、思い半に過ぐ。畢竟するに、『尺素往來』の「いちやう」の訓、正しきなり。
是れにて、「p8」三十年來の疑ひ釋然たり。困りて、この樹名の語原は、鴨脚の宋音にて、假名遣
は「いちやう」なりと定むることを得たり。

右と同時に、「行脚」といふ宋音語あり。「鴨脚」と比ぶるに、「脚」に「きや」、「ちや」の差あり。
是れは、その傳へたる地方の音に因つて異なるなり。今も支那の地方にて因つて、「脚」の音に「きや」
といふあり、「ちや」といふあり。禪宗の臨濟宗、曹洞宗に用ゐる漢語に、同語にて宋音の異なるもあ
り。『林逸節用集』安の部、雜用に「行脚」と見ゆ。

又、泥中に棲息する魚に「どぢやう」と云ふあり。この語の語原は、何なるか、假名遣も「ぢ」な
るか、「じ」なるか究めがたくして、是れ亦、國語學者の苦しむ所なり。

先づ、假名遣につきては、土佐人は、日常言語の發音に「ぢ」「じ」の區別を現存す。嘗て、その國
人に「どぢやう」の發音を聞きしに、「ぢ」なりと答へき。この語は、文安の『壺囊鈔』の一に「鯨、土長」
と見えたるを最も古しとす。因つて舊版の『言海』には「どぢやう」としたり。長享二年の『賦魚鳥
連歌』にも「友どぢや、うちむれ霞む野に出でて」などとあり。されどその原は、如何なることか、
解せられざりき。

明慶の『林逸節用集』には、魚偏に丁の字に、「ドジャウ」と傍訓してあり。東京市中の飲食店の暖
簾看板には、一定して「どぜう汁」と書す。

語原につきては、本草の「泥鱸」の轉なりと云ふ説などあり。されど、本草などいふ書中の語の、
我が民間の通用語となるべき謂われなく、且つ「ぢ」「じ」の違ひもあり、或いは「泥生」又は「土生」
の説などもありて、帰着する所を知らざりき。

然るに、高田興清大人の『松屋筆記』の卷三に、「泥鱸、泥津魚の義なるべし」とあるを見て、驚き
たり。この魚、外來のものならず、開闢よりありしものなるべければ、字音の語ならず、國語なるべ
きことに、おぞくも早く思ひつかざりき。我が思考力の斯くも鈍なるかと、恥ぢ思ひぬ。

この語、泥津魚なるべきこと、動かすべからず。且、この語に之の意なる「つ」のあるに因りて、古語
なるを知る。古くは清音にて、「とろつうを」なりしこと疑ひなし。我が古語に、首音の濁るものなき
は、一般の通例なるに、これは濁り、又「つ」は天つ風、沖つ波、など清音なるべきが如くなるにも
拘はらず、これは濁り、又「ろ」を略し、「うを」を「を」といふなどにつきて、高田大人の説を、尚
詳細に敷衍すべし。

元來、泥といふ語は、盪けた意にて、清音なるなり。今も、とろとろなど云ふ。『日本後紀』、延暦十五年八月に「遊_ニ獵登勒野_ト」、『類聚國史』卷三十二、天長六年十月に「幸_ニ泥濤池_ト」、羅獵水鳥_ニ（今の山城の、みどろの池、又、みぞろの池）とある。「p9」いずれも清音なり。「とろ」の濁音となれるは、水_ニを冠_ラせて、「みどろ」と用い、連聲_ニにて濁れるを、「水嵩_ニ」、「水草_ニ」、「血みどろ」、「汗みどろ」の如く）その「み」の略せられて、「どろ」の濁音のみ存せるなり。「とろ」の「ろ」を略するは、「をろがむ」（_ニ拜む）が「をがむ」となり、「こころもち」（心持）が「こち」となる例にあり。「つ」は、前に擧げたる『塏囊鈔』に「土長」とあり、『賦魚鳥連歌』に「友どち」とあれば、室町時代までは、清音なりと思はる。然れども、濁るは、「嚴之靈_ニ（雷）」を、奈良時代の佛足石の歌に、「伊加豆知」とある例もあり、「うを（魚）」を「を」といふは、『倭名抄』に、「白魚、之呂乎」（『康頼本草』に、「白魚之呂知宇乎」とあり）「針魚、波利乎」とあり。

右の旨に因りて、この魚の語原は、泥之魚にて、それが「どろつを」と濁り、又轉じて「どじょう」の假名遣を定むることを得たり。又「ざうさ（造作）」旅費を「道中ざうさ」などいひ、力を費やさぬことを、「ざうさない」といひ、「この「ざうさ」と云ふ語は、種種に用いられて、造作の字を書けり。

この語の材料を集めたるに、意義凡そ三轉せり。

第一、造作は、家を造ること。
『明月記』天福二年八月五日に「京中大火、自翌日皆造作。」『沙石集』（弘安）卷三の上、北条泰時が住所の修繕に「民の煩ひを思ひて遂に造作なかりけり。」

第二、家を造る費用より轉じて、直ちに、
「入目」、「入費」のこと。『渡邊幸庵封話』（寶永の記、この人、正徳元年、百三十歳にて没す）に、水戸光圀卿に朱舜水の言、「御庭之西湖、相違有_レ之旨難じ、云云、悉く直し候は、造作なるこ

とに候。」
『色參味線』（寶永）に「水風呂より湯風呂が徳なれど、これをこしらへることを造作に思ひ、云云。」
第三、出費の辱きを謝する意より移りて、人の饗應に會へるに、挨拶に云ふ語となる。「御造作でござりました」。仙臺にて、人よりの贈物を謝する通語として、「おいたみをかけまして、おきのどく。」
第四、出費なき意より轉じて、「ざうさない」は、容易_ニの意となる。「無造作」と云へば、力を費やさぬ意なり。家を建てて後、敷居、鴨柄などを取り付け、疊建具など入るるを「ざふさく」といひ、「造作」などと字を當つれど、是れは、「雑作」の字なるべし。作の字の音、造る意なる時は、即各反なり。すべて、前人の説を取り、その事を言はずして、我が著作に記すは、剽竊なり。何書何人の説なること擧げずはあるべからず、さるに、何某の説と定めかぬるものありて、編纂中の一の苦心となれり。

初、某氏の説ならむと認めたるもの、諸書を閲しゆく中に、それより前なる他書に、それを見出し、また、更にそれより前なるより見出すことあり。又、同時なる諸書に、互に出でたるもあるは、伴信友大人、橘守部大人、鹿「p10」持雅澄大人の説などに多し。是れ等、暗合なるべけれど、何れを創説と定むべきなく、此の如きもの、殊に少なからず。かかる事情あるのみならず、余が見聞の狭き、更にその前、その他の書にあらむも知るべからず。囚つて、凡そ、元禄以後の書なるは、特別なるものの外は、何人の説なりと記さず。「と云う」として自説ならぬを標しおくこととしたり。実に已むことを得ざればなり。

『伊勢物語』に、「富士山の事を、その山は、此処（京都）に例えば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、形は、「しほじり」のやうになむありける、」とある。この「しほじり」といふを、古くより、難解の語として、種種の説あるは、人の知る所なり。然るに、名古屋の天野深景大人の隨筆なる『鹽尻』に、この語を、鹽浜にて鹽を焼くに、沙を聚めて堆を成し、これに鹽水を浸し、日に

曝らす、これを「しほじり」と云へり、富士の形に似たりと解かれたり。(されど、「しほじり」の「しり」の語原、解すべからず)然して、この説を、隨筆の開卷第一に記し、且、その書名とせられたるは、この語釋を創見と思はれたるかと思はれ、人も然、思へるやうなり。

天野大人は、享保十八年、七十三歳にて歿せられぬ。(大人の名の信景は、「さだかげ」と訓むと、名古屋市史の編者堀田璋左右氏語られき。)

同時の正徳年中の『風流後日男冊子』に「女房は、御所方に奉公せしとて、今に、そのうつりあつて、しほらしく、すり鉢のうつむけてあるを、富士山と見立て、形は「しほじり」のやうにと、よろずに、きやしやなる言ひかた、云云、「ここに、鹽焼くしほじりとはあらねど、已に鉢を伏せたる形と云ひてあり、しほじりは、難波の川尻の事などいふ説には、遙に立ちまさりたり。

さるに、豈凶らむや、この頃より遙に二百五十年前に、この説あらむとは。應永十三年の『古今序注』に「富士山に多くの名ある中に、しほじり山と云う、云云、海士の鹽たるるに、砂をたれはてて後、打ちこぼす沙を「しほじり」となむいふ。彼山、そのしほじりの姿に似たり故に、しほじり山といふ、云云、伊勢物語に云云」とあり、(『比古婆衣』卷十九)ここに「砂をたれはてて後、打ちこぼす沙」云へる、即ち「鹽後の沙」にて、「後」の語原は、是れなり。沙を「大策」などやうの物に盛りて、覆へし棄つるに因つて、鉢を伏せたらむ如き形を成すなるべし。當時の製鹽法、略知るべし。

語原、或は、鹽代の轉ならむも知るべからず。『日本後紀』、大同二年八月、伊勢神宮の告文に、「禮代の大幣帛」、「出雲國造神賀詞に「神の禮自利」とあり。是れは、試みに言ふのみ。されば、天野大人の『鹽尻』の説は、『古今序注』と暗号にもあるべけれど、創見とはせられず。(製鹽法の違ひは、古今に變遷あるなり。)

『和訓栞』前編、しほじり「伊勢物語に、不二の山の事を、「形」は「しほじり」のやうにてと書けり。

海人の潮たるる砂「p11」をたれはてて後、打ちこぼしたるを、鹽尻と言ふ。今もいふ言葉にて、鹵坵也と云へり」とあるは全く、『古今序注』の説なり。

帶説。

帶説といふ事あり。支那にてある語に、不用の語を附帶せしめて用ゐることなり。この帶説に心付かずして、語原を考ふるに、迷いし事あり。

風雨。

『易經』に「潤之_レ以_二風雨」極めて古き書なれど、風の字は帶説のやうに思はる。

緩急。

緩やかなると急なるとなれど、唯、危急なる意にも用ゐらる。『史記』、袁盎傳「今、公、常從_二數騎_一、一旦有_二緩急_一、寧足_レ恃乎。」

「利害」の「利」、「早晚」の「早」も、帶説なることあり。

翡翠。

翡翠は鳥の羽の赤きなり。翠は青きなり。水鳥の、やませびを翡翠といひ、また翡翠といふよりして、唯、緑なる意となり、緑髪を形容して、翡翠の髮状などいひ、純緑なる玉を翡翠玉といひ、翡は帶説となる。

『異物志』云、翠鳥、赤而雄曰_レ翡、青而雌曰_レ翠。

國家、自家。

家の字を帶説とする場合多し。

睡覺。支那北京邊の音、睡むること。

虎狼。朝鮮の音、虎のこと。

帶説の語、尚あり。この帶説といふものを考ふるに、支那語には、「た」、「きふ」、「こく」などに、同じ發音のもの、極めて多く、耳に聞きて紛ひやすければ、「猶言_二緩急之急_一」などいふ心にて、急といふに「緩急のきふ」、國といふに、「國家のこく」と、氣づくる爲に、附して言へるなるべし。然して、字に書きて、目に見する場合には、言ふを要せざれど、元來、談話の語なるが、書記にも移りた

るならむ。我が國にても、金山寺、徑山寺（共に支那の寺名）を耳に聞きては、聞きわけがたければ、「かね金山」、「こみち徑山」などいひ、人名に「すけ」といふ字、種々あれば、「ほ輔」、「じよ助」などいひ、その他「くろ玄」、「もと元」、「はた秦」、「すすむ晋」など言ひわくすること、皆談話の上の事なるにて知らる。（近き頃の唱へに、「きみ公」、「そろ候」、候にはあらざれど）

謡曲の「猩猩」に、「これは、唐土かね金山の麓、揚子の里にかうふうと申す民にて候」など云ふも、舞臺にて、口に謡うに因るなり。

我が邦にても、二字の熟語に、各その意義あるを、一字を無意義に用ゐるやうになりし語あり。亦、帶説の姿をなせり。語原を研究するに、心得べきことなり。「p12」

與奪。生殺與奪の權など云ひて、與へ又奪ふ意なるを、奪を無意味にして、唯、譲り與ふる意にのみ用ゐらるることあり。子に職を譲るなどにも云ふ。

『職原抄』、太政官。左大臣、「關白之人、爲左大臣時、右大臣、行一上事、是依關白與奪也、」一上は、上卿の一の義にて、左大臣の異稱なり。太政官中の事を、一切統領すればなり。『海人藻芥』、中卷「權中座於有指令者、次第次第、次人可與奪。」

東常縁の宗祇に贈れる消息に、「拾遺、後選、愚老書寫之本云、貴老へ與奪候。」〔東野州拾唾〕北邊隨筆、初編三）

離合迷字。

支那にて離合迷字といふことあり。一字の偏と旁とを離し、或は二字合はせて一字として、迷字（謎）を作るなり。我が邦にも、語原ならで、字源を考えふるにつきて、この事を念頭に置かずはあるべからず。

「絶妙」の字を分けて、「色絲少女」として、「黃絹幼婦」と云ひ、（世説、捷悟）「貨泉」の「泉」

を取りて、「白水真人」と云ふなど、離迷字なり。六十一歳を「華甲」と云ふは、「華」の字の中に、「十」の字六つ、一の字一つあればなり。（本卦回なり。甲は十千の甲、）雙井（井井）を八十とし、来を四十八とするなど同じ。是れ等は、合迷字なり。中井積徳先生（履軒）のその著、通語の末に、その氏を隠して、「檻泉參箇、左壅右涸」とせられたるは、參井の左右なくて、中井なるなり。

貴族の家に、裁縫受持の婢針妙と云ふ。今も宮中に召仕はるる者に、この称ありと聞けり。普通には、お針と云ふなり。この針は解せらるれども、妙とは如何に。針仕事に優れたるに云ふ意にもあるまじと考へ居たりしに、『醒睡笑』（元和）の參自墜落の談に、或檀那寺に參り、暫く雑談して立去るに、明日、無菜の齋を申さむと云へば、庫裡から「めう」が楚忽に出で、言ひける、「幸の事や、明日は、お坊様の精進の日ぢや」とあり。

この「めう」は妙にて、少女の合迷字なり。梵妻の隱語なり。この妙の、専ら針仕事する者に、針を冠らせて、針妙と云へるなり。僧侶の隱語の、普通語となりしを悟り得たり。

ウルユスと云ふ賣藥あり。片假名書きの看板の、今も場末の生藥屋などに掲げてあるなり。この藥名、片假名なれば、阿蘭陀藥ならむと思ひ、遍く和蘭の辞書を探りたれども得ず。然るに、何ぞ圖らむ、離迷字ならむとは。この藥は、緩和の下剤なれば腸内を「空シウス」の心にて「空」の字を參分にして作りたりる名なるを知りて、捧腹絶倒せり。ウツホを采の字に作れると、好對なり。明和、安永、天明の頃、幕府の老中、田沼玄蕃頭、全權の驕奢にて、和蘭の器物を愛玩したるに因りて、一時、蘭器、蘭藥など、大に流行せり。その頃、賣れゆきの好からむを圖りて、蘭藥めきたる名を附したるものとおぼゆ。

「米」を離して「八木」とし、「杜木」を合して「杜」とし、「土杯」を「坏」、「緑木」を「椽（縁側）」、「風木」を「凧」、「風巾」を「凧」、「十じ（十字）」を「辻」、「文々」を「p13」「刃」（唐ノ開元通

寶ノ一文ノ目方)、「又手」を「扱」、「船尾木」を「梶」、肉の雪白なる魚を「鱒」、東海の魚を「鯨」とするなど、枚擧すべからず。字を省きたるは、「春日部」を「春日」、「五十日嵐」を「五十嵐」なども、少なからず。

倒語。

「あたらし」と云ふ形容詞は、惜むべしの意なり。可惜事など、今もいふなり。「新しき」意なる形容詞は、「あたらし」なるべきを、「あたらし」といふは、平安朝の頃より紛ひたるにて、奈良朝以前には、言はざりし語なりと云ふ。この「らた」の「たら」となりたるは、「あたらし」の發音滑らかならざれば、發しやすきに從へるものか、とにもかくにも、顛倒なり。

『萬葉集』、二十の十一丁(一本) 「年月は、安良多安良多に、相見れど我が思ふ君は、飽き足らぬかも。」

『催馬樂』、新年、「安良多之支、年の初に、かくしこそ、仕へまつらめ、萬代までに、」尊圓親王御筆、鍋島侯爵所藏書苑、七ノ二〇

『古今集』卷二十、大歌所「あたらしき、年の初に、かくしこそ、千歳をかねて、樂しきをつめ。文字には、「定考」と書きて、倒さまに、「かうぢやう」と讀むが讀例となり居るなり。是れは、倒讀にあらず、讀例なり。この讀例は、「ぢようかう」と讀めば、上皇とも聞ゆるを憚りてなりと云ふ。然る時は、平安朝の頃より、「ぢやう」、「じやう」、「かう」、「くわう」の音、既に混淆したりしものか。「定考」とは、六位以下の官員に、加階せしめむが爲に、その人物、行跡を定め考へらるる儀なり。「称唯」といふ語、是れも「いしよう」と倒讀すべき讀例なり。是れは、漢文法に「称唯」と書きて、それを「称唯」と讀むなれば、「称唯」の意にて、そのまま「いしよう」と云ふなるべし。「おおと申す」とは敬ひて慶へて、「おお」と聲を發することなり。

山城の太秦の「牛祭祭文」(恵心僧都の作と云傳ふ。寛仁元年、七十六歳にて寂す)に、「僧坊の中に忍入て、物取る世古盗人」とあり、「こそこそ」、「こそこそどろぼう」、「こそせせ」、「こそつく」など云ふは、この世古の倒さになりたるものなるべきか、又は頭に「こ」を加へて、「こそせせ」が、「こそこそ」とつづまりたるものか。

旧本、『今昔物語集』卷二十七ノ十八語に、「格子の迫の塵ばかりありけるなり、此板こそこそとして入りぬ。」

『宇治拾遺物語』卷六、觀音經、化蛇、「蛇、云云、谷より岸の上さまに、こそこそとのほりぬ。」
「ぐりはま(蛤)、又、「ぐれはま」といふ。江戸時代の初より行はれし語にて、蛤の倒語なり。物事の喰違ふ意に云ふ。蛤は、兩殻の合口は、極めて密接するものにて、逆にすれば合ふことなし。

『佐夜中山集』(寛文)宗因、「ありがひも、何ぐりはまの、生御魂。」老後の述懐の作かと云ふ。『柳亭筆記』卷二)

「p14」
男子の鬢毛生際の刺付の風に、外へ圓く弓形なるを、「はまぐり」と云ふ。これと反對に、内へ刺り込むを「ぐれはま」といふ。

『俳諧破邪頭正』(延寶)に「清水の瀧を、瀧の清水などと言はば、作意にもなるべし。「祇園林」を、「林祇園」とは言はれまじ、云云。是を連歌にては芋の山(山の芋の倒)とて、大きに嫌ふ。俳諧にては、ぐりはまと云ふ。」(『用捨箱』下)

連歌俳諧に、「今宵の月」を「月こよひ」、「をちこちの野邊」を「野邊のをちこち」と云ふを難ずる者あり。東花坊の十論に「畠山左衛門佐」を「助左衛門」とすれば、農夫となり、『商賣往來』を「往來

商賣」とすれば、道中飛脚か雲助か。」

最近の物の注釋には困却すること尚多し。たとへば、飛行機の如き、骨折りて調べて、その構造など記すに、半年過ぎぬに、その製造全く變ず。かくては、二年も経なば、辭書の解は誤となりて、却つて人を惑はすこととなるべし。その外、郵便規則の如き、頻繁に改正せられ、酒醬油の如き、日、新製法起る。

されば、此の如きものは、漠然と記し置くこととせんとす。飛行機は、人の乗りて空中を飛行する機械、とやうにして、その専門の書に譲るべし。目前の物事は、現在、その道の人に聞かば知られむ。辭書は、古き書を読み、不審なる語にあへる時、引きて見るといふこと多ければ、余は、古き語に力を致すべし。新しきには、作者、自らその人あるべし。語原研究の話、一寸思ひつきたるところ、此の如し。(大正四年十一月記)

《補遺》

※原文には漢字表記の語に振り仮名が施されていないが、讀解の便宜のために若干の讀みがなを「ひらがな」表記で補讀することにした。